



釜本
邦茂



阿久根
賢一



支える人と支えられる人という関係ではなく、互いに支え合える関係性の構築こそが真の支援（阿久根）

阿久根 認知症の方をケアしていく上で、私は支える人と支えられる人という関係ではなく、互いに支え合える関係性の構築こそが真の支援だと考えているんです（第一章『認知症ケア』大転換!）。サッカーのようにチームスポーツも、互いに支え合う関係はやはり大事ですか。

釜本 それは大事なことですよ。人間は誰しも得手、不得手があります。全員が平均して、同じように仕事ができるわけではありません。誰かの出来ない部分を、出来る人がカバーしてあげる。サッカーの場合はチームスポーツですから、出来る人と出来ない人がたくさんいるわけですよ。それをお互いが、カバーし合う。ところで海外で活躍する日本人選手には守備の選手が多く、攻撃の選手は少ないでしょう。それは、なぜだと思いますか。僕はここに日本人の、“誰かのカバーをする”という特性が表れていると思うんです。ヨーロッパの人は自分が大事だから、ボールを持ったらいけいけで攻めていく。その時に攻撃を止められたら、どこが穴になるのかを察知して、そこをカバーするのが日本の選手。だからヨーロッパでは、ものすごく貴重な存在なんですよ。

阿久根 察する力、というんですかね。表には出てこないんですけど、自分が次にどう動けば相手の為になるかがわかっている。日本人は潜在的に、その力を持っているんですよ。

釜本 だから海外の監督は、日本人のディフェンダーをすごく評価する。その代わりオフェンスの選手への評価は高くないから、あまり試合に出られないでしょう。互いが互いを補い合えば、バランスのとれたチームになる。僕も現役時代は、「オレが2倍の力で攻めていくから、オマエは攻撃に出てこなくていい。その分、後ろで守っとけ。」と、よく言っていましたね。

阿久根 それが、チームですよ。

釜本 チームでどうするか、それが大事なんですよ。組織が強くなっていくためには、一人ひとりが大きくなっていくことが必要。個々の力が弱ければ小さな輪にしかないけど、強ければ輪が大きくなる。どちらの組織が強いかは、簡単ですよ。だからまずは、自分を鍛えなくては行けない。これしかありません。自分の役割はなんなのかを認識して、自分でトレーニングしなさいと言いたいですね。

阿久根 我々のケアの仕事も、チーム力に尽きると思いますね。私たちはサービスの質は、一人ひとりのフェロー（＝ケアワーカー）の質だと思っています。24時間、365日支援していこうと思うと、最終的にはチーム力。それがサービスの質に、つながっています。この人はいいサービスをしているけど、あの人はダメだったではいけないんです。全体の為に適した役割を任せ、任された者はなにを果たしていくべきかを考えて行動する。それこそがチームワークで、これが高まれば、必然的にケアの質も高まっていきます。

釜本 互いに補わない合うからこそ、チーム力は高まっていくんです。

阿久根 まさに、そうですね。豊泉家には、たとえば150の力を持っている人がいたとすれば、50の力しか持っていない人もいます。だけどそのような人たちがチームを構成して、成果を出しているんです。私たちのケアの現場には、ハンディキャップ有している方も介護士として働かれています。ハンディキャップを有しているからといって支援されるばかりではなく、そういった方々も自分が支援する側に立って、誰かの役に立てるのもすごく大切です。

釜本 健常者であるとか障がい者である、認知症を持っているとかは関係なく、皆なにか取り柄といいますか、その人にしかない、良いものを持っているはずなんです。そういったものを引き出してあげられる、社会であってほしいね。

阿久根 その通りです。最初に釜本さんが仰られたように、認知症はなられた方が周りにいらっしやらないと、意外と遠い存在の病気であったりするんですよ。それにネガティブな話題も多く、厄介者とか困った人みたいな言われ方をします。私たちとしましては、認知症があったとしても心豊かに過ごしていただける為の、お手伝いが少しでもできれば、それが私たちの仕事の価値だと思っています。棒サッカーをされている方の中にも、認知症を持っている方はたくさんおられます。釜本さんを見ると皆さん喜ばれますし、勇気をいただいています。これからも、長いお付き合いをお願いします。

